

われわれの遠い祖先はどのような生活をしていたのか？

賈 蘭 坡

この問題について、わたしは、今を遡ること200万年前から述べようと思います。というのも、今日、中国大陸において発見される最古の原始人の遺物、その遺骨が、今からおよそ180万年前の西侯度文化と、170万年前の元謀人のものだからです。

さて、山西省芮城県の西侯度村古文化遺跡からは、石器stone artifacts ところどころ30余点、焼かれた動物の頭蓋骨と歯牙、さらに打ち欠いた痕、あるいは削った痕のある鹿角など、今日すでに絶滅した脊椎動物の化石20余種が発見されています。

現在の西侯度一帯の環境は当時とはずいぶん異なっており、黄河左岸からわずか3キロしか隔たっていないにもかかわらず、東側の山地が毎年上昇していることから、かつて原始人が活動した地表面は、今の黄河河床より170メートルも高くなっています。現在ここは水の便が甚だ悪く、地下の水位もたいそう深く、雨水の奔流によってできる溪谷のほかは、常時水の流れる小川もないほどです。

ただ、西侯度文化の主がここに居住した頃は、むしろ広くて深い水域であったと考えられ、このことは文化遺物と同一層から発見された大ビーバー Large Beaver が水陸両生の動物であり、それが一定の広さと深さの河や湖を必要とすることからも理解されます。このほかコイの鰓蓋骨が発見されており、その大きさから判断して、もとの体長は50センチ以上あったと見られ、このことも当時水域が一定の深さと安定した状況にあったことを裏づけています。

発見された動物群を見ると、その多くが草原、あるいは叢林に生息する種類であり、当時付近一帯がまばらな林、草原という環境であったことが知られます。さらに哺乳動物がその絶対多数を占め、しかもそれが温帯以北に生息する類であることは、当時このあたりの気候が現在に比

していくらか寒冷であり、四季の区別ははっきりして、夏には緑草、きのこが繁茂し、冬にはこれらが枯れて、動物達のあるものは、これらの干草を食べたであります。

では、雲南省元謀県上那蚌村付近の元謀人生息地の、当時の環境は如何だったでしょう。

元謀人の化石については、左右の上内側門歯が発見されただけですが、ほかに数点の石器と哺乳動物の化石多数が見出されています。動物群の大部分は、主に温暖で湿潤な環境、たとえば草原や灌木のまばらな林に生息する種類で、これは花粉分析 spore-pollen analysis の結果とも基本的に一致しております。

西侯度文化の主にしても、元謀人にしても、その顔つき、体つきは明らかでなく、これは西侯度遺跡から、どんな人類の化石も発見されていないことにもよりますが、ともかくも元謀人の化石については二本の門歯しか発見されていません。ただ人類が猿と共通の祖先から進化したものである以上、かれらは猿類の祖先の時代からそれ程遠く隔たってはならず、その顔つき、体の構造は、猿に近いものであったと理解されます。アフリカでは、元謀人と同時代の人類の化石が相当数発見されており、それら骨盤、大腿骨、脛骨、脚骨などは、わたしたちにこの方面についての知識を与えてくれます。人類学者の研究から、わたしたちは、この時期の祖先はすでにヒトの姿に近く、すなわち二本の足によって直立歩行していたと考えています。ただそれは、体を左右に揺すって、まるでゴリラが歩くような様子だったでしょう。

西侯度文化の主にしても、元謀人にしても、その生活は獣類とほとんど変わることがなかったと言えます。男女、老若を問わず、かれらは終日食物を求めて奔走したのです。実際、“食”はかれらの生活において、まず第一の関心事であり、またこれにくらべられるほど重大なことはほかになかったのです。しかも事実、かれらはそれ以上のことを求めず、腹を満たせばそれで満足したのです。

ところで、その頃、腹を十分に満たすのが何と容易なことだったでしょう。このことは、かれらが使用した道具を見ることで理解されます。道具が生活水準の高低をうかがう上に最も都合よいものだからです。わたしはいままでに、古代の人類の生活がすこぶる快適であることを描いた復原図をいくつとなく見てきましたが、それはかれらが鹿の肉

を手にして、むさぼり食う様子で、見る人たちをなるほどと思わせるものです。しかし、こうした場面は常にあるわけではなく、功を奏してうまくぶつかった場合だったのかも知れません。かれらが手にするのが木の棒であり、その二本の足がなお猿の祖先の性質濃厚なことを見れば、常に大きな獣を捕獲できたなどとは、とうてい想像できないことです。

かれらは雑食で、肉食もし、菜食もしました。その狩猟といえば、わずかに小型の獣を捕えるのみで、多くは蛇や昆虫の類の捕獲です。採集はかれらの生活の重要なよりどころで、果物や食用になる根茎、若芽がその主なものでした。西侯度遺跡で発見された三稜大型尖頭器^{ポイント}は、石の先端を打ち欠いた掘る道具として用いられたものです。

ここで特に注目されるのは、西侯度遺跡から焼かれた骨、元謀人生息地からは多くの木炭粒が発見されたことで、これらはいずれも人類が火を使用した証拠と言えます。この発見が重要なのは、それが人類の火を使用した歴史をいっきに100余万年も引き上げたことにあります。以前は、北京原人の時代から、人類がはじめて火を用いたと考えられていました。

人類がはじめて火を使用し、火が人類によって征服されたことは、人類の歴史におけるひとつの里程碑と言え、この火によって、人類の歴史が一変したことなど、あらためて申すまでもありません。その果たした役割りの大なることは人びとのよく知るところで、今日に至っても、何人もこの火を離れることはできないのです。しかし、火を人類のために奉仕させることは容易でなく、火との闘争において、どれだけ多くの先輩がこれに敗れたかはわかり知れません。火は、生のままで食べることから、熱を加えて食べるようにし、その使用は、食べられないものを食べられるものへと変えました。火はまた、人びとに光を与え、これによって人類は夜間にあっても、もはや盲人ではなくなりました。さらに火は人びとに温暖をもたらし、厳冬や寒夜をも容易に過ごせるようにしたのです。要するに、火の強大な力は、人を形成してゆく過程にあって、これに次第に“人間性”を与え、自らを改造する役を担ったと言えます。

今から70—20万年前の北京原人の時代になると、生活はずっと良くなり、これ以前とはほとんどくらべようありません。わたしが周口店の発掘にたずさわったのは前後4分の1世紀の永きにわたり、まさにかれらの“家”で大きくなり、成長したとも言えるほどです。ですから、わ

たしはかれらの“家”については比較的よく知っているわけで、ここではそのことに関してやや詳しくお話したいと思います。今年7月、東京において“北京原人展”が開催されたので、みなさんはかれらにお会いになったことと思います。かれらの顔つきがどうだったかなどはあまり多くを述べず、展覧会で話題に乏しかったこと、あるいはまったく話題にならなかったことだけをお話することにしましょう。

一考古学者が、古代人のゴミの堆積中からその“生活”について述べることも、あながちゆるされぬことではないでしょうし、特に先史時代についてはなおのことと思われるからです。わたしたちは、北京原人が居住した遺跡から、ほぼ26,000立方メートルのゴミ——堆積物を掘り出し、それらの中から北京原人の遺骨40余个体、10万点以上の石器、獣骨や鹿角を用いてつくった多数の道具、焼いた石や骨、厚い層の灰燼、このほか100余種の脊椎動物の化石などを発見して、これら堆積中から出土した資料をもとに、研究を進めてまいりました。

北京原人は、どのようにして周口店に50万年の永きにわたって住みつづけることが出来たのでしょうか。これは父が祖父を継ぎ、子が父を継ぎ、孫が子を継いで、代々相伝したものとは考えられません。おそらく、一群の北京原人が一時期ここに住みついたのち、食物が不足したか、あるいはその他の何らかの原因によって他へ移住し、その長い年月を経て、また別の一群の北京原人が他からここへ移り住んで、“家”に定住することとなったのでしょうか。40メートル余におよぶ堆積の中間層の数層に、ハイエナの糞を見ることは、この洞穴がハイエナによって何度も占拠され、また洞穴がいく度となく大水によって浸されたことを物語っています。

かれらの生活が過去に比して好転したことは、道具が改善されただけでなく、火を十分利用したからと言えます。道具の類型は以前より複雑で多くなっており、石器が使用目的によって分化され、かれらは異なる方法で異なる石材を加工する術を身につけていました。石器の組合せの中には、小型の掻・削器や尖頭器など、すこぶる精巧なつくりものがあり、これらは、今日でも専門的技術をもつ人でなければ、まねてつくり出すことが出来ないものです。

ところで、特に火を十分利用したことは、その生活状況を大きく好転させました。あるところでは灰燼が堆積しており、火を四方に広げてい

ないことから、かれらが一歩進んで火を手中におさめ、これを管理していたことをうかがわせます。火の威力を利用することによって、野獣の住みついた洞穴をたやすく奪いとることが出来、そのため夜は広野に野宿し、昼は定まった場所もないということは無くなったのです。しかも、かれらが居住したところ、特に洞穴の入口で火をたきさえすれば、そして何人かがその火の消えぬよう番をすれば、野獣の来襲をも防止出来たわけで、それによってあいた人手を狩猟や採集に向け、さらに多くの生活資材を求めることが出来たのです。

北京原人の遺跡から発掘された各種の獣骨はすこぶる多く、野猪やいくつか異なる鹿類など、それは全部で千体にもおよびます。鼠や蝙蝠の類は時に層をなして発見され、それら個体の数は、数えきれぬほどです。ここで注意されるのは、発掘された獣骨で完全なものは極めて少なく、また鹿の角の全体が発見されることも必ずしも多くないということです。これは“骨を^な敲いて髓を吸った”ことのほか、それが骨器や角器の材料として用いられたからと言えます。

獣骨はまた、その多くが焼かれたものです。このことが、北京原人はあぶった食物を食べ、肉類がすでにかれらの求める食料であったと予想する理由です。わたしたちは、北京原人が、しばしば火を利用して狩猟したと考えております。つまり、周口店付近には多くの断崖、絶壁があり、北京原人が火を使って野獣を断崖に追つめて死なせることも、少なからずあったのです。かれらが木の棒を手にし、その二本の足で追いかけるだけで、大きな獣を獲得したとは、とうてい思えません。あるいは、かれらは虎や豹などの猛獣が、馬、牛、鹿など弱い動物を捕えたのにたまたま会い、かれらは火をふりかざして威かし、猛獣を追いちらして、虎などが残した“^{おこぼれ}剩落”をかすめとった——いわば、虎口から食を奪うこともあったのでしょう。

北京原人の生活条件が以前に比して改善されたとは言え、それはなお異常に苦しいものでした。まず、かれらの生命が極めて短いことで、統計によれば、14歳以下で死亡する子供は39.5%、50—60歳の間に死亡するものは2.5%を示しています。次に“食人の風”の問題があります。いわゆる“食人の風”は、人の肉を食うという習慣が当時人びとの間で許されていたということに他なりません。誰しも、わたしたちの祖先がかつてこのような不名誉を冒していたとは信じ難いでしょうが、実は

このようなものでした。今までの記録を見ると、“食人の風”の歴史は、北京原人の時代には始っていたようです。人類学者が今世紀の30年代末に提起したこの問題は、かれが、発見した多くの北京原人の頭蓋骨の上に傷痕があり、それも重いものによって打たれたと認めたことに起因します。わたしもまた、北京原人の頭蓋骨の模型を何度となく観察した結果、“食人の風”が提起されることには根拠があるように思われました。わたしが50年代の初め、多数の獣骨の碎片中から、ひとつの小さな焼かれた上腕骨を発見したことは、この“食人の風”について、直接の証拠に加えられるものです。

人類は絶えず進化を遂げ、今からはぼ5万年前頃、すなわち旧石器時代中期になると人類の顔つきは、わたしたちにいいよ近づき始めます。1, 2万年前になると、人類は変化して、現代人とほとんど区別がつかなくなります。かれらの体つきは長身となり、顔つきもりこうそうになります。かりに、かれらがわたしたちと同じ服を着、いまここにやって来て講演を聞いたとしても、恐らく誰も奇異には感じないだろうし、じろろ見る人もいないでしょう。

この頃の人の知恵は、普通の人たちには想像出来ないほど進んでいました。かれらは槍、弓、落し穴によって狩りをし、モリを用いて大魚を捕えていました。しかも、かれらは火の威力を発揮しただけでなく、人工的に火を起こすことが出来、いまや火種を保存しなければならない制約から解放されたのです。また、すでに骨針があり、裁縫の能力のあったこともうかがえます。かれらは、石塊や獣牙、頭骨を用いて装飾品をつくり、自らを飾ることを知り、さらに、死んだ仲間を埋葬するという、一定の埋葬儀式をも生み出したのです。以上のことは、いずれも過去には見られぬことです。

中国において発見されたこの時期の人類の化石は、少ないとは言えぬものの、内容的に豊富な遺跡は、そう多くはありません。ここでわたしは、今から18,000—11,000年前の周口店の山頂洞人、すなわち“上洞人”を中心に、この時期のかれらの生活の様子についてお話ししましょう。

槍の穂先は、ヨーロッパで数多く発見され、また投げ槍 dart-thrower の柄も発見されていますが、中国ではまだこの種のものは見出されません。ただ、山頂洞人の遺跡からは、枝を切り落とした赤鹿の角が出土し

ており、その表面がきれいに削りとられている痕があることから、わたしはこれを先端を欠いた槍の穂先と考えております。近年来発見されている資料によると、中国の先史時代の人びとは、相当古くに弓を発明していたようです。今から28,000年前の峙峪文化遺跡では、以前石の矢じりが出土し、その大きさはもとより、加工の状況、形状から見て、矢じりとする以外、他に分類上含めようのないものです。

現在に至っても、中国の旧石器時代晩期にはモリは見出されませんが、山頂洞からは魚骨を用いてつくった装飾品が出土しており、かれらが大魚を捕獲する能力をもち、その生活の拠りどころを拡げていたことが知られます。これは人類史上の一大進歩と言えましょう。山頂洞出土の装飾品の中には、穴をうがった草魚の眼窩の骨があり、その大きさから、もとの魚の体長は80センチにも達したと思われます。魚を捕えるための道具は、なお発見されていませんが、ただ両手のみで捕獲できるものでないことだけは確かです。

山頂洞から発見された一本の骨針は、針長82ミリ、針はわずかに曲がっており、滑らかに磨かれてありました。針の一端は鋭利に尖り、他の一端は鋭い器物によって穴をうがったものですが、残念なことに針穴はすでに破損していました。骨針の発見は、当時裁縫がすでに一定の水準にあり、皮衣を一針一針縫う技術のあったことを示しています。しかも、衣服の縫製を知ったことは、人類が自由の王国へ大きな一歩を踏み出したとも言えるのです。わたしの見るところ、当時人びとが服をまとったのは、もっぱら防寒のためで、“スタイル”とか“羞恥心”、“礼儀”などとはまったく無縁のことです。このような観念は、後になって芽生えたものです。今日、世界のいくつかの後進的村落では、衣服はなお極めて簡単で、女子は草でつくった腰みのをまとい、男子は腰に帯をつけるだけで、時にはまったく何もつけないものもあるくらいです。

多くの国々の旧石器時代後期の遺跡や墓からは、頭飾、頸飾、耳飾、腕飾などに用いた装飾品が多数出土し、身体を飾る習慣が当時広く行なわれたことを物語っています。わが国で発見された最も早い装飾品は、峙峪遺跡の グラフアイト 石墨を用いてつくった首飾ですが、ただし、山頂洞から発見される装飾品が最も豊富と言えます。

山頂洞の装飾品には、穴をあけた獣牙、貝殻、穴をうがった石珠、小礫石、魚骨、さらに溝を刻んだ骨管などがあります。かれらの装飾の目

的は、もっぱらその勇ましさと知恵を顯示することにあつたと言えます。穴をあけた獣牙では、あなぐまの類が最も多く、狐牙も少なくありません。次いで鹿歯、その次がいたちの歯牙で、最も少ないのは老虎、野猫の類の歯牙です。これら動物は、かれらが日常狩りの対象とした動物と見ることが出来ます。穴をうがった歯牙のうち最も多いのは、これら動物の犬歯で、すべての歯牙の96%を占めています。犬歯を用いて装飾品をつくることは、ひとつには犬歯が歯牙のうちでも稀少なものであり、その少ないことによってさらに意義を高めるということもあったでしょうし、また一方では、食肉類の犬歯は新月形を呈しており、たんに美しいだけでなく、歯根が長く大きいことから、穴をうがつのが容易であつたということにもよるのでしょう。穴をうがった小礫石や小石珠については、これはかれらの知恵を象徴するものと言えます。つまり、小礫石の穴は両面からうがたれており、両側から正確にうがつということは甚だ困難であつて、知恵が一定程度に達してはじめて出来ることと、かれらが知っていたからです。

埋葬は、ヨーロッパにおいてはるか数万年前、旧石器時代後期の一時期に始まつたと見られています。中国において発見される最も早い墓葬は、山頂洞と言うことが出来ます。山頂洞の形状は、東西がちょうど区切られて二室からなり、東側、つまり洞口側の一室はかれらが居住したところで、発掘時、地表の中央には灰燼の堆積が発見されました。西側の一室のくぼみが山頂洞人たちの死者を埋葬した場所です。

墓葬箇所からは、三個の完全な人類頭蓋骨と軀幹骨が発見されました。これらの人骨の下に赤鉄鉱の粉末が敷かれていたことで、墓葬として疑いないことが明らかになったわけです。世界の同時期の墓葬はいずれも赤鉄鉱を用いた殉葬であり、洋の東西いずれもが赤色であることは、おそらく血液を象徴したものと思われます。生きる人たちが死者に血液を添え、おぎなつて、かれが別の世界で生きつづけることを願つたのでしょう。今日みれば、死者のこのような埋葬は一種の迷信とも言えますが、歴史的には、この問題もまた、人類の思想がいっそう複雑化してきたことを示し、大きな進歩と言わねばなりません。

以上、わたしは旧石器時代の人類の生活状況一般について、そのあらましを述べてまいりました。この後は新石器時代に入り、この分野はわたしの専門でもなく、また時間の関係もあることから、この講演もこの

■ あたりまでにさせて頂きたいと思います。

(訳・安田治樹)

執筆者の賈蘭坡氏は裴文中、吳汝康氏とともに現代の中国、人類学・先史学者のうち第一級の学者で、現在、中国科学院古脊椎動物与古人類研究所研究員（教授）である。同氏は戦前、すでに周口店における北京原人の発掘に参加し、原人の発見と研究とに貢献したことで世界的に有名である。

昨、1980年秋、明治大学の招待で来日した際、本学で同氏の講演が予定されていたが、都合で実現できなかった。よって今回、同氏のお許しを得て、当時用意された原稿を翻訳し、本号に掲載するものである。

経済学部教授 鈴木 尚（人類学）

我们的远古祖先是怎样生活的？

贾 兰 坡

我想从距今200万年以来来谈这个问题，因为目前在中国大陆上发现的最古老的原始人的遗物或遗骨，只有距今大约180万年前的西侯度文化和170万年前的元谋人。

从山西省芮城县西侯度村的古文化遗址里计发现有石制品 (stone artifacts) 30余件、一些被火烧过的动物骨头和牙齿。一些带有砍痕或刮痕的鹿角以及20种现已绝种的脊椎动物化石。

现在西侯度一带的环境和从前大不一样，这里离黄河左岸虽然只有3公里，但由于东边山区逐年上升，使原始人曾经活动过的地面今天已比黄河河床高出170米。现在这里非常缺水，地下水位很深，除了到处是被雨水冲的沟壑外，连条经常流水的小河也没有。

可是，当西侯度文化的主人在那里居住的时候却有广而深的水域，因为和文化遗物同一层发现的巨河狸 (Large Beaver) 是习惯于水中和陆地生活的动物，需要有广而深的湖泊或河流。此外，还发现有鲤鱼的鳃盖骨，从它的尺寸来估计，原来的体长可能超过半米，也证明水有一定的深度和稳定。

从所发现的动物群来看，多数是草原或丛林中的种类，证明当时附近一带应是疏林草原环境。再有就是哺乳动物的大多数成员，都是暖温

带以北的种类，当时的气候可能比现在当地还要偏凉些，四季分明，夏日绿草如茵，冬季枯萎，因为还有一定数量的动物是适于吃干草的。

那么，在云南省元谋县上那蚌村附近的元谋人地点，当时的环境又是如何呢？

元谋人化石，只发现了两颗左右上内侧门齿、几件石器和大量的哺乳动物化石。从动物群的大部分种类来看，是温和湿润、以草原——灌木丛林为主的环境，这和孢粉分析（spore-pollen analysis）的结果基本相符合。

无论是西侯度文化的主人还是元谋人，对它们的面貌和身体还知道得不清楚，因为在西侯度遗址里尚未发现过人类的任何化石，元谋人也只有两颗牙齿。但是，人类既然是从猿类进化来的，离开他们猿类祖先的时代又不太遥远，面貌和身体构造更接近于猿是可以肯定的。在非洲，和元谋人同时期的人类化石发现较多，有盆骨、大腿骨、胫骨和脚骨等，给了我们一些这方面的知识。据人类学家们研究，我们这时期的祖先是人形的，能用两腿直立行走，可是，无论如何，走起路来还不免有些左右摇摆、蹒跚的样子。

无论是西侯度文化的主人，还是元谋人，还都过着和兽类差不多的生活。不管是男是女，是老是少，都得终日为食物奔忙。说实在的，“吃”是他们生活中第一需要，再没有别的事比这件事重要。他们事实上也没有什么更多的要求，只要填满肚皮就满足了。

不过，在当时能够填满肚皮又谈何容易！只要看一看他们所使用的

工具就知道了，因为生产工具是衡量生活高低的最可靠的尺寸。我看过许多复原图像把远古人类的生活描写得很舒适，手里拿鹿脯大嚼，倒也令人神往；但这种场面不会常有，不知要多凑巧才遇上一次呢。就凭着他们手中的木棒，加上他们带有浓厚猿类祖先性质的双腿，能够经常获得大兽，在我看来是不能想像的事。

他们杂食，既吃草也吃素。他们狩猎，只能获得小兽，更多的捕捉蛇、虫之类的东西。采集是重要的生活来源，既采干鲜果品，也采可食的植物根茎和嫩芽。在西侯度遗址里发现过一件三棱大尖状器，就是用石头打击成的挖掘工具。

特别应该提到的是，在西侯度遗址里发现了烧骨，在元谋人地点发现了很多炭屑，都是人类用火的证据。这一发现之所以重要，是因为它把人类用火的历史一下子提前了100多万年。过去，只知道从北京人时代起人类才开始成为火的主人。

不要小看人类最初使用的这把火，火为人类所制服，是历史上的一面里程碑，因为有了火就改变了历史面貌。它的作用之大是人人知道的，因为直至今日谁也不能离开火。可是，使火为人类服务却也来之不易，不知有多少老前辈在和火斗争中被火吞掉。有了火就可以由生吃变为熟食，使一些不可食的东西变为可食；火还可以给人以光亮，使人类不致在黑夜中成为盲人；火给人带来了温暖，使人容易渡过严冬和寒夜。总之，火是个强大的力量，使形成中的人逐渐确定了“人性”，改造了自己。

到了距今70—20万年前的北京人时代，生活比过去好多了。在此以前的人，谁也比不过它。前前后后我在周口店工作了四分之一世纪，可以说，是在他们“家”里长大成人的，对他们“家”里的情况当然也就知道得比较详细，因此，我在这里就多谈一些这方面的东西。今年7月间在东京都举行了“北京原人展”，我想大家都和他见过面，对他的面貌如何我就不再多说了，只想谈谈在那次展览会上比较少谈到，甚至没有谈到的东西。

不必讳言，一个考古学者是在古人的垃圾堆中讨“生活”，史前时期更是如此。我们从北京人居住过的遗址里扒去大约有26,000立方米的垃圾——堆积物，发现了代表有40多个个体的北京人的遗骨、上10万件的石制品、大批用兽骨和鹿角制的工具、无可计量的烧石和烧骨以及厚层灰烬，此外还有100余种脊椎动物化石，我们就根据从垃圾堆中扒出来的这些材料进行了科学研究。

北京人怎么会在周口店停留长达50万年之久呢？这当然不是父继祖，子继父，孙继子，代代相传的，而是当一群北京人在那里居住一个时期之后，由于食物缺乏，或者是其它什么原因迁走了，不知过了多久，又有一群北京人由别的地方来到这里安了“家”。在高达40多米的堆积里，中间埋藏着好几层鬣狗粪，证明这个洞穴也曾几度被鬣狗占据过，同时水也曾几次漫淹过这个洞穴。

他们的生活之所以比过去有了好转，不仅因为工具有了改善，同时还更充分地利用了火。工具类型比以往要复杂得多，证明工具在使用上

已有了进一步分工，而且还知道了使用不同的方法加工不同的石料。在石器组合中有些石器制作得很细致，如某些小刮削器、小尖状器和石钻等等，即使是到了现在，没有专门技术的人也是仿制不出来的。

特别是由于火的充分利用，局势则大为好转。有的地方灰烬成堆，未使火到处蔓延，证明又进一步驯服了火。利用火的威力可以很容易地把野兽住的洞穴夺取过来而不致夜宿旷野、昼无定地。同时，在他们居住的地方，尤其是在洞口，只要点上一把火，留有少数人来照料不使火熄灭，就可以防止野兽侵袭，腾出手来从事狩猎和采集，以谋求更多的生活资料。

从北京人遗址里发掘出来的各种兽骨很多，如野猪和不同的鹿类都有成千个体。鼠类和蝙蝠，有的地方成层的发现，个体之多，无法计算。应当注意的是，从这里挖掘出来的兽骨完整的很少，连完整的鹿角也不多。这是除了“敲骨吸髓”外，也制作骨器和角器的缘故。

兽骨有很多是被火烧过的。完全有理由可以设想，北京人是熟食的，肉类已成为他尽力谋求的食品。我还相信北京人经常凭借火把来狩猎。这也就是说，周口店附近有许多断崖陡壁，北京人很可能利用火把将野兽赶下断崖摔死。不然很难设想就凭着他们手中的木棒，和他们的两条腿能获得大兽。同时，更可能的是他们遇到虎豹之类的猛兽捕食到马、牛、鹿之类的弱者时，也会用火把将猛兽吓跑而掠取“剥落”——从虎口里夺食。

尽管北京人的生活条件比以前有所改善，但还是异常艰苦的。首先

是他们的生命很短促，据统计死于14岁以下的儿童占39.5%，死于50—60岁之间的占2.6%。再有就是“食人之风”的问题。所谓“食人之风”，是指食人肉的习惯得到人们允许。大概谁也不愿承认我们的祖先曾有过这样不光彩的事，可是事实却是如此。

根据现有的记录来看，“食人之风”的历史从北京人时代就开始了。人类学者远在30年代末就提出了这个问题，因为他发现北京人的许多头骨上有伤痕，并认为是用重物打击所致。我又多次观察过北京人的头盖骨模型，认为所提出来的“食人之风”是有道理的。我在50年代初期，从大批兽骨碎片中发现了一小段被火燃烧过的人的肱骨（即上臂骨），更增加了“食人之风”的直接证据。

人类不停的在进化，到了距今大约5万年前后的时候，即从旧石器时代中期开始，人类的相貌和我们愈来愈近。到了1、2万年前，人类变得和现代人没有什么区别了。他们身材修长，面庞英俊。假如说，给他们穿上和我们同样的衣服到这里来听讲，恐怕没谁感到特别，会多看他们一眼。

这时候人的聪明智慧是一般人难以想像得到的。他们使用标枪、弓箭、陷阱狩猎，用鱼叉捕捉大鱼；他们不仅更能发挥火的威力，并且能人工取火，再也不会像过去那样受保存火种的限制了；他们已经有了骨针，证明已有缝纫能力；他们能用石块、兽牙或骨头制作装饰品，懂得了美化自己；还晓得了埋葬死去的同伴，而且还创造出一定的埋葬仪式——这些都是过去的人所没有的。

在中国发现的这时期的人化石，虽然并不算少，但内容丰富的遗址并不多。在此，我只想以距今18,000—11,000年的周口店的山顶洞人（即“上洞人”）为核心，把这时候的生活情况作个简要的描述。

标枪头在欧洲发现很多，并发现有标枪投杆（dart-thrower），可是在中国并未发现过这类东西。只是从山顶洞人遗址里发现过一段被截掉枝叉的赤鹿的角，表面有清楚的刮削痕迹，我认为是一件尖端缺残的标枪头。从近年来发现的记录表明，中国的远古居民很早已发明弓箭。在距今28,000年前的峙峪文化遗址曾发现了一个石箭头，无论是从它的尺寸、加工的现象和形状来看，除了把它称为箭头，在分类上没有更好的办法。

直到现在，在中国的旧石器时代晚期还没有发现过鱼叉，可是在山顶洞里却发现了用鱼骨制成的装饰品，证明他们有能力捕大鱼，扩大了生活来源，这在人类历史上也是一大进步。山顶洞的装饰品中，有一个钻孔的鲢鱼眼上骨，根据它的尺寸，估计原来鱼的体长可达80厘米（cm）。尽管未找到捕鱼工具，但只凭双手捕捉是难以办到的事。

从山顶洞里发现了一件骨针，针长82毫米（mm），针体微弯，打磨得很光滑。一头是锋利的尖，一头是用极尖的器物挖成的孔。可惜针孔原来已残破了。骨针的发现，证明当时缝纫已达到一定的水平，出现了一针一线缝制皮衣的技术。懂得缝制衣服，又标志着人类向自由王国迈出了一大步。在我看来，当时人们穿衣，只是为了防寒，什么“好看”、“羞耻”、“礼貌”之心，他们都没有。这些观念是后来培着出来的。一直到

现在，世界上某些后进部落的衣服还非常简单：有的妇女只是穿草制的围裙，男人只是腰间系条带，甚至什么都没有。

在许多国家的旧石器时代后期的遗址或墓葬里，发现用作头饰、颈饰、耳饰和臂饰等装饰品很多，证明当时已普遍地有了妆饰身体的习惯。在我国发现的最早的装饰品是峙峪遗址的用石墨制的项坠，但在山顶洞遗址发现的装饰品最多。

山顶洞的装饰品中有穿孔的兽牙、穿孔的海蚌壳、钻孔石珠、钻孔小砾石、钻孔的鱼骨和刻沟的骨管等。他们装饰的目的，是为了显示他们的英雄和智慧。穿孔的兽牙以獐类最多，狐牙也不少；次为鹿牙；再次为黄鼬牙，最少的是老虎、野猫牙。这些动物可能是他们经常狩猎的对象。在穿孔的牙齿中最多的犬齿，占全部牙齿的96%。用犬齿作装饰品，一方面是因为犬齿在全部牙齿中是最少的，取其少数作为代表更有意义；另一方面食肉类犬齿呈新月形，不仅美观，齿根长大也容易穿孔。至于钻孔的小砾石和小石珠，可以说是智慧的象征。比如，那件小砾石的孔是从两面对钻的，懂得了对钻而且钻得又很准确，只有智慧达到一定的程度才能办到。

埋葬制度，在欧洲远在数万年前的旧石器时代后一阶段就开始了。在中国发现的最早的墓葬是在山顶洞。山顶洞的形状，东西向好象分隔成了两间，东边的即临洞口的一间，是人居住的地方，在发掘时在地面的中间还发现有一堆灰烬。西边一间的下坎就是山顶洞人埋葬死人的地方。

在墓葬里发现完整头颅骨三具和部分身体上的骨骼。由于人骨之下铺有赤铁矿粉粒，证明是墓葬无疑。世界上的许多同时期的墓葬都有赤铁矿殉葬，可能是由于这些东西都是红色，象征血液。活人给死者再添补上血液，希望他到另外的世界上生存。在今天看来，如此埋葬死者不能不说是一种迷信，但从历史的角度来看这个问题则又是一大进步，因为思想已大大地复杂化了。

我前边只是扼要地讲了一下整个旧石器时代的人类生活情况。以后就是新石器时代了，一方面非我的工作范围，另一方面由于时间关系，只能讲演到这里。

(賈蘭坡·中国科学院古脊椎動物与古人類研究所研究員〈教授〉)